## パネルディスカッション「中国医薬・鍼灸の自国化再考」
## ［研究発表1］

# 日本漢方の鼻祖，田代三喜の医学

鈴木　達彦
帝京平成大学薬学部／千葉大学大学院医学研究院和漢診療学／北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部

曲直瀬道三が師事した田代三喜は，中国医学の模倣を脱却した日本漢方の礎を作ったとされる．確かに，田代三喜の残した医書には，後述するように中国医学一辺倒とはいえない独自性を有しているといえる．ただし，三喜が当時から関東古河の名医として知られてはいたとはいえ，三喜自身の著作が存命中から広く読まれ，全国に名を轟かせていたとはいうことはできない．足利学校に遊学していた道三が三喜の医学を享受し，帰洛後に曲直瀬流の医学を確立したことが大きいといえよう．

### 大陸の医学の導入と金沢文庫の漂着医書

帰洛後の曲直瀬道三は，金元医学，とりわけ李朱医学を標榜した．道三は自著において，たびたび渡明した師匠すじにある月湖，導道，あるいは明監寺から，直接，もしくは伝え聞くなどして李朱医学を伝授されたことを述べている．このためか田代三喜が明に留学して大陸の最新医学を学んで帰朝し李朱医学を広めたとされることがあるが，三喜が渡明したことを示す確実な事跡は見出し難い．そればかりか，当の道三が渡明した師としてあげるのは，三喜ではなく導道など前述の人物である．また，月湖が『全九集』を著して中国において出版したとされることがあるが，中国側にはそうした記録は確認されておらず，内容を精査すると少なくとも現伝のものは道三が京都に戻ってから手を加えたものであるという報告がある．このように考えると，渡明した師から直接李朱医学を享受したというのは標榜した自身の学説を引き立てる意味合いがあったとすることができる．

しかしながら，三喜と道三が大陸の医学に精通していたことは事実である．金元医学といっても，実際にはそれらを受けた明代の医学書から情報を得たとみられ，なかでも『玉機微義』からの引用は三喜，道三の医書に頻繁に確認することができる．それでは，三喜が渡明をしていないと仮定した時，どこから医学書の情報を得たかと考えると，『今大路家記鈔』の記載が注目される．

> 「一説曰鎌倉建長寺有僧，曰江春，曰三喜，曾有明船漂着著金沢，其船中多医書，江春，三喜取之，学医術薬稍彰，道三就三喜学医後受得導道術云」

ここでは，漂着した明船にあった医書が金沢文庫に入ったものを江春と三喜が得て学んだとされ，さらには，三喜に医学を学んだ後，導道に教えを受けたと三喜と導道が別人物であることが記されている．田代三喜に関連する資料に「江春庵（あるいは香春とも）」と記載されているものがあるが，三喜の兄に当たる人物に周琳（周林）がおり，『今大路家記鈔』の江春と三喜を別人物ととるときは，江春を長男の周琳のことを示すと推定される．また，江春庵とは，鎌倉の建長寺（円覚寺ともされる）の塔頭のこととされており，周琳と三喜は兄弟であるとみられるので，江春庵が周琳と三喜のいずれを示していても不自然ではない．

古河の三喜と称されるように，道三が師事していた頃の三喜は古河を中心として活動していたとみられ，沼森，足利，川越（越生）を居住地や出生地として推測しているものがあるが，漂着船の医書を勉強して医学を身につけたとするならば，鎌倉の江春庵にあったころをキャリアの初期とみることも可能

であろう．さらに，『秘伝秘薬諸病治方』には，「伊豆国」，「豆州」との記載があることも，鎌倉を中心とした地域での活動を傍証する．

**基本処方と加減方の体系と，弁証配剤（察証弁治）の体系**

田代三喜の処方運用の体系には2つの大きな体系がある．1つは，本方とされることがある基本処方を設定し，細かな病証の違いについては，生薬を加減して対応するという基本処方と加減方の体系である．基本処方と加減方は，当時の局方派にすでにみることができる．田代三喜の『本方加減秘集』は，中風から始まる病門ごとに処方を列記している前半部と，それに対になるように加減方を記載した「諸病加減」がやはり中風から病門ごとにまとめた後半部で構成されている．『本方加減秘集』の基本処方の多くは『和剤局方』をはじめとする既存の医書に収載されている処方であり，その点においては，半井流などにみられる基本処方と加減方に類似する．ただし，一般的な基本処方と加減方は，1つの処方について複数の加減方が設定されるが，『本方加減秘集』の場合は，前半部と後半部が別れていることで，全般的には，加減方はその病門の処方に通用するものとして設定されている．

もう一つは，『和極集』などにみられるような，基本処方を用いないか，用いるとしても既存の処方とは異なったもので，1つ1つ生薬を組み合わせて処方を作り上げていく弁証配剤による治療体系である．

**独自の作字と薬物理論**

田代三喜の薬物書は，「能毒」と称される．三喜の原書に近いとみられるものが数点現存している．五臓を中心とした分類（肺気，心血，脾胃，肝虫，腎精）を基本として，さらに3分類（香類，発散，切痰）を設けて102種の生薬を収載している．各々の生薬には，気味，薬能，毒（禁忌や不適応証）の項目に分けて記載しており，独自の薬物理論がみられる．特に特徴的であるのは，生薬の表記法に独自の作字を用いている点である．三喜の作字について，流派の極意を秘匿するための隠字と理解されることがあるが，生薬の異名などを利用した一般的な一字薬銘ではない．「亻（にんべん）」は気，「牛（うしへん）」は血といったように，へんやつくりに薬能の意味を持たせてあり，それらを組み合わせて作字している．そのほかの三喜の医書においても作字が用いられており，重要な意味合いを持たせていたと考えられる．

**五輪砕と刻・牛八**

前述の『和極集』における弁証配剤においては，通常用いられない「刻」と「牛八」という用語が使われている．刻は，処方の書きはじめの語として「刻ニ〇〇湯トス」というように用いられ，弁証配剤を記し，加減方などを記した後，最後に「牛八に帰す」と記して終える．三喜は，これ以外にもさまざまな意味合いを持たせて刻と牛八を用いている．

刻と牛八を理解するためには，田代三喜による『酬医頓得』を参考にできる．『酬医頓得』には仏教医学の思想をみることができ，一般的な医書とは一線を画している．冒頭において，「其療術者，刻帰牛八」としており，刻と牛八を重視していることがわかる．

「故為医為患如車輪，故以一輪薬療，一輪破損疾，雙輪合行而至天処，是此本分源義医王円城也．入此円城輩離色心，本心的真車帰牛八矣」

ここでは牛八を円城にいる医王（薬師如来）に至る車に例えている．片方の車輪が施術者（薬物治療）で，もう片方が患者（疾病）であり，2つの心が通じ合うことではじめて両輪が回り，薬師如来に至る

と考えられている．

『酬医頓得』には五大説の地水火風空と，真言の阿鼻羅吽欠（アビラウンケン），および五行が結びついていることを表す五輪塔が描かれている．ここにみられる仏教医学の思想は，梵字の「阿」が5つに色分けされ，それぞれが五輪塔から，諸感覚器，五臓，六腑，脊中，形体へと線でつなげられる，五蘊説をもとに「阿」字や五輪塔が解体され，感覚器から体の諸器官へと展開する五輪砕の概念である．

「色即是空，空即是色，色受想行識之刻，除迷雲，号良医良薬而至根本｛阿：梵字｝字」

『酬医頓得』では，五蘊の色受想行識を刻とし，梵字の「阿」に結び付けていることから，刻と牛八は阿吽に対応していると考えられる．生薬の表記における作事と考え合わせると，五輪砕の思想のもとに「阿」字を解体される存在である．三喜の作字は生薬の薬能を各々の要素にまで分析，解体していき，そこから再構成させることで出来上がっている．三喜は察証弁治において「阿」字である刻から「吽」字である牛八にまで到達させる過程の中で処方を組んでいる．この思考では，薬能をもとに解体しうる字形であるということも，処方を組んでいく上で意義を持っていたと考えられる．

**本道以外の医学**

曲直瀬道三，玄朔は，小児や養性などの本道以外の専門的な医書も先駆的に著したことが知られるが，田代三喜の医書にもすでにみられる．小児科では『三帰廻翁医書』に収載される『小児諸病門』があることが知られている．しかしながら，本書については，江戸期の板坂流の小児科医書と類似性があることから判断が難しい面がある．それとは別に，『中沢氏秘方筌』に収載されるもので，「田代香春伝来」と記されている『小児科秘方』があるが，こちらは『三流小児五疳秘書』（帝京平成大学所蔵）に収められている小児科医書と類似している．『三流小児五疳秘書』の当該部分は，「下総国古河田代香春小児療治秘書」と内題があり，五臓の疳に対する処方などが収載されている．

食養性書では『諸食禁好集』がある．本書は，通行本の『宜禁本草』とは異なる内容を有するが，西忍の『薮明集』に関係性をうかがえる部分があることから，後代にも影響があったことが認められる．そのほか，婦人科や金瘡・外科，鍼灸などの著作も認められる．

田代三喜に師事した曲直瀬道三は，おそらくは三喜の下にいた時よりも，帰洛後の方が多くの大陸の最新医書に触れることができたと考えられる．また，三喜において重要視されていた仏教医学的な側面や，それに基づいた独自の作字などは道三は採用しなかった．しかしながら，道三は当時の中国の最新の医学を受容しながらも，弁証配剤による処方の組み方や，生薬の薬能についての考え方など，治療の根幹的な部分は三喜の影響を受けている．田代三喜の医学は，のちに後世派医学の流れを決定づける曲直瀬流に大きな影響を及ぼしていたことは明確である．